

昔々、豪腕で国を治めていたスルタンがいた。彼は3つの権利を有していた。初夜権、所有権、そして委託権である。最後のものは、すべての住民が、或る期間旅に出る時には、帰るまでの間、財産をスルタンの許に委託するというものだった。更に、所有者が帰って財産を回収する際には、スルタンは利息を取った。

或る日、非常に頭がよく、清廉で金持ちの若い男が旅に出ることになった。彼はすべての金を2つの箱に入れて蠟付けした。彼はそれをスルタンのところへ持って行き、言った。

「半年の間旅に出ますので、帰るまで私の財産をあなたに委ねます」。

半年の長旅の後、彼は戻ってスルタンに会いに行き、言った。

「私の財産を回収しに来ました」。

スルタンは隣の部屋の見張りの者に会いに行くよう伝え、彼らは若者の財産を返した。彼は箱を持って家に帰った。彼が一つ目の箱を開けると糖蜜しかなかった。二つ目も同じだった。スルタンに騙されたことで失望し、彼は何が出来るか考えた。

「財産を要求は出来ないし、そんなことをすれば殺されるだろう。しかし、黙っているわけにも、こんな仕打ちをされるがままというわけにもいかない」。

彼はスルタンに会いに戻り、箱には糖蜜しか入っておらず金がなかったと申し立てることにした。スルタンは理解できない振りをして、若者に申し立てを繰り返させた。スルタンは誰も若者の金に触れていないと断言してからひそかに思った。

「もしこいつを殺せば、人々は蜂起して、無実の者を殺したとして私を責めるだろう。黙っていたら、それは私が盗人であることを裏付けるようなもので、私が人々をペテンにかけていたことを皆知ることになるだろう。裁判をやるしかなく、裁判官は私の地位を守るだろう。何しろ、彼が金を置いていったという証拠がないのだから」。

スルタンは若者を呼んで言った。

「私の正直さと善意を証明するためには、裁きの前に立つほうがいいだろう。そして裁きがこの件に決着をつけることになるだろう」。

若者は告訴を行い、裁判所に召喚された。彼は幾つかの尋問を受けた。

「いつ、お前の箱をスルタンの許に預けたのか？ 預かり証はどこにある？」。

若者は正確な日付を言うことも、預り証を出すことも出来ず、証拠が無いということで訴訟に負けた。

家に帰る途中、彼は考え、糖蜜作りが専門の職人を探しに行った。彼らは、箱に糖蜜が入れられた日付がわかると言った。彼らは、もう一度訴えを起こすように勧め、彼のために証言すると申し出た。裁判官は、今度は証拠を示すことが必要だと言い、彼は持っていると答えた。スルタンが召喚され、糖蜜入りの箱が運ばれ、7人の職人が登場した。彼らは糖蜜の味見をして、最後のひとりまで一言も発しなかった。裁判官は彼らをひとりずつ呼び、全員が糖蜜は三ヶ月前のものだと断言した。スルタンは尋問された。

「この若者が箱をあなたの許に預けたのはいつでしょうか？」。

スルタンは六ヶ月前だと答えた。そこで裁判官は言った。

「ということは、あなたが嘘をついたことになり、あなたは盗人で嘘つきだと皆の知るところになるでしょう」。

若者は剣を抜いてスルタンを殺した。彼は代わりにスルタンになり自分の財産を取り返した。